

米子城 魅せる！プロジェクト2016

米子城フォーラム 「城メグリストとお城博士の米子城わくわく講座」

・日 時 平成28年10月1日（土）

13：00～16：30

・場 所 ふれあいの里 大会議室

●講演 1

「海を臨む天空の城、米子城」

中井 均 氏（滋賀県立大学人間文化部教授）

○司会 それでは、これより講演に移らせていただきます。

「海を臨む天空の城、米子城」と題しまして、滋賀県立大学教授、中井均さんのご講演です。

ここで簡単ではありますが、講師の中井均さんのプロフィールをご紹介します。

中井均さんは、財団法人滋賀県文化財保護協会を経て米原町教育委員会勤務。退職後、NPO法人「城郭遺産による街づくり協議会」理事長として、全国のまちづくりにもかかわってこられました。長浜市長浜城歴史博物館館長などを歴任し、現在は、滋賀県立大学人間文化学部地域文化学科教授でございます。

専門は日本考古学で、日本各地の城郭の発掘調査、整備の委員なども務められ、また、「日本の城」や「近江の山城ベスト50を歩く」、「城館調査の手引き」などの多数の城郭研究本の著者でもあります。

それでは中井さん、よろしくお願ひします。（拍手）

○中井氏 ただ今ご紹介いただきました中井と申します。よろしくお願ひいたします。

会場にこれだけの人が来られてるとは夢にも思わなくて、心配してたんですが、たくさんの人に来ていただいて大変ありがとうございます。

米子市民の方にとって、やっぱり米子城への関心が高いんだっていうことが、来ていただいた人の人数でわかるんだろうというふうに思っています。実は私、先ほど市長さんからもご紹介いただいたように、1月にも米子城のシンポジウムでお話をさせていただきました。ですから、たった9カ月で新しい考え方が出るっていうわけにはなかなかいきませんので、今日は少し視点を変えて、日本の城郭史じょうかくと申しますか、日本の歴史の中で米子城が、どういう位置付けができるのかっていうようなお話をさせていただきたいというふうに思っています。

実は、今週月曜日に米子城を見に寄せていただいたとこなんですね。今、登り石垣っていう石垣の発掘調査をしているので、それを実際に見て今日の話をしてほしいということやったんです。月曜日、お昼からちょうど松江へ行く用事があったんで、月曜日の午前中やったら空いてますよって言ったら、ほんなら午前中来てくださってと言われて。私、家が滋賀県の天津ですから、午前中に来ると申すことは、前日の夜に来なあかんということなんですね。しかも前

日、浜松にいたんです。米子市教育委員会の方にはいつもうまく使われてしまうんですが、最終のやくもで日曜日に寄せていただいて、月曜、朝一番から現場を見せていただきましたが、これは本当に見ておいてよかったなと思います。

今日の私の話の中心の一つにもなりますし、萩原さんとのトークでも恐らく話題になるんだろうと思いますが、「登り石垣」というものです。あまり聞いたことのない用語だと思います。普通、石垣っていうのは、^{くるわ}郭と呼ばれる本丸だとか二の丸の周りを石垣で囲うわけですが、登り石垣っていうのは、山城の頂上部分から^{ふもと}麓にかけて^{せきりい}石塁が落ちていくような形でつくられているんですね。要するに、敵の斜面移動を封鎖するというものであります。こういう登り石垣っていうのは、実は、日本の近世のお城の中でも非常に限られたお城でしかつくられていないんです。実際のところ、おそらく彦根城と、それから淡路の^{すもと}洲本城と、伊予の松山城と、それから^{たじま}但馬の竹田城くらいかなと思っていたんですね。それが今回、米子城でも発掘調査で明らかになって、日本の近世のお城に登り石垣の使用例が一つふえたということで、大変意義深いものがあると思います。

それから、もう一つ、この米子城というのは、やはり中海、海に臨む山につくる必要があったということなんですね。今日、「海を臨む天空の城」と書いたんですが、今、天空の城とか雲海に浮かぶ城というのが日本各地であって、一番有名なのは但馬竹田城というお城です。竹田城はもう行かれた方もあるかもしれませんが、年間50万人ほどの方が行かれるそうです。50万人ですよ。私は雲海とかには全く興味がなかったんですが、但馬竹田城の構造というのはやっぱりすごくおもしろいので、学生時代に見に行っていたんですが、当時は日曜日でも人がいない。なおかつ車で上まで上がれたんですよ。それが今は、皆さん下から歩いて上っていく。それでも50万人の方が行かれるんですね。まさに雲海の上に石垣が浮かぶ天空の城というその名前のおおどろきと思うんですけども、米子城はさらに海に臨んでいるという、竹田城では体感できない、海を臨む天空の城だといえると思います。まさに山陰随一の名城だろうというふうに思っています。

実は、海に臨むという点を少し注目したいわけですね。私のレジュメは2ページからなんですけれども、「海への進出」と書いています。

米子城の築城は^{きつかわひろいえ}吉川広家という毛利の一門の人物であります。毛利の一門ではありましたが、天正19年(1591)に豊臣秀吉から出雲3郡、伯耆3郡、安芸1郡、隠岐1国の14万石の大名に取り立てられました。毛利家の家臣ではありますが、秀吉は独立した大名としてこれだけの領地を与えたわけですね。吉川広家としては^{もうりてるもと}毛利輝元の家臣であるという認識は持っているのですが、大名になった段階で、皆さんは^{あまご}尼子氏の城としてよくご存知だと思いますけれども、安来に^{がっさんとだじょう}あります月山富田城の城主になるわけですね。それとともに、この米子の築城も行うんですね。

月山富田は出雲に属するので、与えられた伯耆3郡の支配の核として米子築城を行ったというふうに今までは考えられてるわけですね。あるいは、もっと大胆な説でいいですよ、月山富

田城は山の中にあり過ぎたので、新たな大名の居城として米子城を築城した。つまり吉川氏は、米子城を居城にしたというような説が今まで大方を占めているわけです。果たしてそうなのかということなんです。

実は米子築城は天正19年なんです。天正19年というのは一体どんな年かというのを日本の歴史の中で考えてみると、間もなく年号が文禄に変わり、文禄・慶長の役と呼んでいる秀吉の朝鮮出兵が行われた年に当たります。おそらく私は、米子築城というのは、この朝鮮出兵をにらんで、海に面したところに居城を移したのではないかというふうに考えています。

これは米子だけではわからないんですが、それ以外の西国の城を見ていきますと、例えば土佐の国、高知のちょうそがべもとちか長宗我部元親は、おおたかきじょう大高坂城という現在の高知城から浦戸というところにお城を移します。あるいは、肥後のこにしゆきなが小西行長は八代湾に臨んだむぎしまじょう麦島城というところに新たな築城を行います。つまり、この天正19年くらいに西国の方では、大名たちが抱えている水軍の将兵たちを出しやすい海に臨むところに城づくりが活発に行われているわけです。そうした中で米子を見ていくと、吉川広家は決して居城を米子に移すのではなくて、月山富田は海に面していないので、水軍あるいは朝鮮をにらんでいくという段階では、海に面したところという理由で米子の地を選んだのではないかというふうに考えられるわけです。

じゃあその後、月山富田城はどうなったのか。今まででいうと、富田城には一旦入ったけれども、その後米子城を築いたので富田城はもう使われてないというふうに思われがちなんです。実は富田城はその後使っています。つまり吉川広家としては、居城はやはり富田城である。これは尼子が山陰の府としてつくった城でありますから、そこに入るというのは大変大事なことなんです。それを放棄するというわけにはいかないわけです。伯耆の国に入ったからといって放棄するわけにはいかんのです。 (笑声)

恐らく米子は、海に面した、文禄・慶長の役における布石としてつくったんだけど、あくまでも吉川領国の居城はそのまま月山富田城に置いているのではないかというふうに私は考えております。

そのあたりもう少し詳しく申し上げますと、例えば最近、富田城で発掘調査をしているんですが、石垣が累々と出てまいります。富田は後に、ほりおよしはる堀尾吉晴が松江に移してしまうわけですが、富田城の石垣には松江城では見られない特徴があります。

松江城では石垣の石に矢穴という石を割る技法が見られます。今日の資料の20ページですかね。矢穴が図化されているのでわかっただけだと思いますが、10センチから15センチくらいの溝を点々と石に刻んで、そこに鉄のたがねを入れて玄能でたたいていくと石が割れるというものです。切手のミシン目を想像してください。ぴりぴりぴりっと割れるということです。米子城へ行くと、米子城の石垣にもこの矢穴というのが点々と残されています。歯形みたいになってるやつですね。これが松江では見られるのですが、富田城にはほとんどないんですよ。

つまり、富田城の石垣は矢穴が出現する以前の石垣であるということです。富田城は尼子氏

の居城ですから、石垣は尼子氏が築いたというふうに従来言われているんですが、現在の城郭研究では、尼子時代には石垣の城っていうのはまだ日本にはないわけで、富田城に石垣が出現するのは、やっぱり吉川段階なんですね。吉川広家が入ったくらいに石垣の城になっていきます。そういう時代の石垣が富田城にあるということで、これと類似するものが米子城にもあるわけなんですね。

私、レジュメの中で、米子城の石垣というのを大体6時期(①～⑥)ぐらいに分けてみました。米子城に行かれたら、石垣に積み方の違いや石の加工精度の違いっていうのがよくわかると思います。お城の石垣っていうのは築城したときのものがそのまま残されていると思われがちなんですが、江戸300年間の日本の城っていうのは、地震で崩れた石垣を積み直す、また地震で崩れる、また積み直すを繰り返しているわけでありまして。

米子城にも少なくとも6回以上の石垣の変化というのが認められます。一番古いのが①ですね。天正19年の石垣、つまり吉川広家が初めて米子を築城したときの石垣ではないかと思っています。これは飯山いいのやまに残された石垣や八幡台はちまんたいの石垣で、野面積みのづらづと言われる、ほとんど加工していないというものです。

それと②。私は、天守台がそうなのかなと思ったり、それから今回発掘調査をされている登り石垣もそうなのかなと思っているんですけども、矢穴が少し入ってまいります。つまり矢穴技法で割った石が入ってくる打込接うちこみはぎと呼ばれるものですね。

それから③は、まさに関ヶ原の合戦が終わって、中村一忠なかむらかずただが伯耆1国の大名として新たにやってきて、尾高城から米子城に入ってくる。その米子城を改修したときの石垣。おそらく枡形ますがたであったり、二の丸の石垣や三の丸の石垣っていうのが、どうもこのあたりのものなのではないかというふうに思っています。

以後、池田が入ってきた、それから荒尾が入ってきた。そして幕末、嘉永5年(1852)に現在の小天守、四重櫓やぐらのところの谷積みと言われる積み方とか。このぐらいの時期差は当然あるんだろうというふうに思っています。

さらに私は、吉川を2つの時期に分けてみました。吉川前期、これが天正19年。吉川後期、これを慶長3年(1958)頃というふうに見たわけですね。まずは、今ちょうど調査をしている登り石垣の写真を少し見ていただけますでしょうか。もう皆さんもごらんになったのかもしれませんが、これちょうど遠見櫓ないぜんのほうから内膳丸ないぜんの方に続いているラインであります。

私のレジュメでいいますと、5ページ、図2をご覧ください。米子市教育委員会で作成された米子城の測量図にちょっと太く線を入れてみました。天守台の上の方にちょっと出っ張ったところがあります。これが遠見櫓のところですが、そこから北の方にある出丸の内膳丸に伸びたところ、ここにちょっと太く線を入れました。これがちょうど今見ている登り石垣のラインになるわけですね。要するに、山の斜面に石垣がつくられているということです。これ何枚かありましたですかね。「7枚」と呼ぶ者あり)これは、逆に下からずっと上を見ている。このラインです。このラインが本丸の下の遠見櫓までずっと続いているわけですね。西側が海側に

なります。北側の山麓に二の丸があるということですね。

この登り石垣であります、さっき言いましたように、日本には彦根城、それから淡路の洲本城、伊予の松山城、ちょっと見せていただけますかね、写真あると思います。これ伊予の松山城ですね。上の方から見てるんですが、こういう山の斜面にずっと石垣があるということなんです。これはやっぱり二の丸と言われる御殿を守っています。これも同じですね、ちょうど右下の方に登り石垣というのがずっと続くわけですね。ありがとうございます。

あるいは、これは彦根城の登り石垣ですが、西の丸の石垣のちょうどそのつけ根のところから山の斜面にこういう具合に下りていってるわけですね。こちら側から来る敵を斜面移動させないという。彦根の場合はこの上に土塀たてぼりが乗っていました。瓦塀と呼ばれています。ありがとうございます。これはちゃんと外側には堅堀まで掘ってるということですね。堅堀と登り石垣がセットになっているという状況なんですね。ありがとうございます。あるいは、これ下から見たラインです。これ、すごいでしょ。ずっと彦根山の上に向かって、これ西の丸の石垣なんです、こういう具合に登り石垣というのがつくられているわけでありす。

それと、これは彦根城の大手の登り石垣ですね。大手門の枡形であります、枡形のところから登り石垣が鐘の丸の向かって伸びている姿であります。

これは洲本城ですね。これ、山の上からですが、もうほとんど見に行く人がいないのでこういう状況なんですね。ここは足踏み外すと滑落するようなところで、必死でこれ撮った写真なんです、これがその登り石垣であります。これが上の郭の石垣になりますね。登り石垣がずっと上の方に向かっていっています。ありがとうございます。

これら登り石垣っていうのは、今言いましたように、日本では数少ない城でしか使われていないんですが、それは一体何をモデルにしているのかというと、まさに秀吉が朝鮮出兵のときに、朝鮮半島の南岸に築いた幾つかの日本式の城、倭城わじょうなんですね。

これは、西生浦倭城そせんぼというもので、これが山の上の石垣ですけれども、ずっとこの山麓に向かって石垣が出てきてるわけですね。あるいは、これちょうど山の上に石垣が若干見えると思いますが、そこからこういう具合に登り石垣が落ちてきているわけですね。段が幾つか見えますが、ここがいわゆる朝鮮出兵のときに布陣した大名たちの兵の駐屯地になるわけで、それを守っているということですね。だから、山上と山麓を一体に守りたいっていうことで、山の斜面に登り石垣をつくっているわけです。

あと、これは蔚山うるさんという、加藤清正が籠城戦ろうじょうをしたところでありす、蔚山倭城の登り石垣ですね。これは麓から上の方を見ております。これ、山の上の石垣で、こういう具合に登り石垣があつて、堅堀があるんです。この姿は、先ほどの米子城の登り石垣をほうふつさせるわけですね。米子城の登り石垣は、残念ながら上の方がかなり崩れてしまって基底部しか残っていないですけども、本来はこういう形やったということがいえるわけでありす。つまり、文禄・慶長の役で朝鮮半島につくった倭城と呼ばれる日本の城の影響を多分に受けているということなんです。例えば、先ほどの日本の城の中で、淡路洲本城は文禄・慶長の役に参戦した

脇坂安治がつくった城でありますし、伊予の松山も、文禄・慶長の役に参戦した加藤嘉明がつくった城ですね。つまり、日本における登り石垣というのは、文禄・慶長の役の影響を受けた、言い換えると文禄・慶長の役の後につくられたということになります。

さあ、そうすると、米子城の登り石垣であります、天正19年に吉川広家がつくったものではないということになります。つまり文禄・慶長の役の後、さらに言うと、吉川広家は実際に朝鮮に参戦渡海していますから、おそらくそこで倭城の登り石垣を知って、国へ帰ってきてからつくったのではないかというふうに想定できるわけでありませう。

それと、安来の月山富田城にもう一つ大変おもしろいものがありまして、富田城では、発掘調査をしたときに滴水瓦と呼ばれる朝鮮瓦が出てくるんですね。この朝鮮瓦は、日本列島の中で幾つかのお城で使われています。姫路城の瓦をよく見ていただきますと等三角形、軒平瓦のきひらがわらは三角形の形をしている。あれは実は朝鮮の瓦なんですよ。あと、熊本城でも使われていますし、山陰では鹿野城なんかでも使われています。つまり熊本城や鹿野城は、どうも清正や亀井が参戦して朝鮮の瓦を見て、日本の城に採用するようです。月山富田城では発掘でこの朝鮮の瓦が出ていますので、吉川広家は文禄・慶長の役で戻ってきてから、やっぱり自分の居城というのは月山富田城やという認識を持っていて、そこに朝鮮瓦をどうも使ったようですね。

一方、米子城には文禄・慶長の役でつくられた登り石垣を採用したというふうに考えられるわけですね。じゃあ、その時期はいつかということですね。私は慶長3年(1598)から慶長5年(1600)までというふうに考えています。なぜそんなに時期が絞れるのかということですが、慶長3年に豊臣秀吉が亡くなります。慶長5年は関ヶ原の合戦が起こります。この2年間、日本列島の中はどのような状況になったかということ、親徳川家康派と石田三成派に分かれていくわけですね。日本列島が極度に軍事的緊張に追い込まれるわけでありませう。毛利輝元は西軍の大將なわけですね。関ヶ原の合戦って石田三成と徳川家康の戦いのように言われていますが、西軍の本当の大將は、大阪にいて関ヶ原には行かなかったんですが、毛利輝元であります。恐らく慶長3年、秀吉が亡くなって、世の中が不穏な動きの中で毛利氏は、もし戦争が起こったときに敵が領国に入るのを防ぐために、自分の領国の一番東側で城の大改修を行ったのではないかというふうに考えています。その一つが、実は米子城であります。それ以外に、例えば月山富田もこの段階で改修をしていますし、岡山へ行きますと、レジュメにはちょっと書いたんですが、総社市にあります鬼身城というお城。これも毛利の家臣の穴戸氏が城主でいたんですが、ここに大変すごい石垣が残されています。ちょうど国境になるわけですよ、領国の一番東端になるわけですね。つまり毛利が関ヶ原を見越したというか、徳川との戦争を想定して、秀吉没後、慶長3年から関ヶ原の合戦までの間につくったのではないかというふうに私は見ております。

レジュメの、例えば6ページ、図3をご覧ください。これは幕末の米子城の絵図ではありませうけれども、何がわかるのかということ、本丸の右側に出丸と書いてあります。出丸は内膳丸のことですが、よく見ていただきますと、天守の右下、小さな二重櫓が書いてあります。これ遠

見櫓なんですね。その二重櫓から出丸に向かって塀が書いてありますね。これが実は登り石垣のラインになるわけです。これは古い方の絵図ですが、まさにこれです。彦根城と一緒に、どうも今発掘をしている石垣の上には、ちゃんと土塀が乗っていたというのがわかるわけですね。つまり海側から来る敵に対してはこっちから内側に入れない。しかもそれは内膳丸と一体化しているということでもあります。もう一度図2を見ていただきますとよくわかると思いますが、海側から見たら、本丸直下の遠見櫓からそのまま登り石垣が内膳丸に向かって出っ張ってる。内膳丸は、もう崖の下がすぐ海でありますから、米子城のつまり西面を完全にここで遮断しているということが言えるわけなんですね。そういう構造がわかります。

それから、実はもう一つおもしろいのは、その登り石垣のラインから右の方へ見ていっていただきますと、私、本丸の下から1本太い線を書いています、どうもここに堅堀があったようなんですね。登り石垣ではなくて、今度は山の斜面に堀を縦に掘っています。等高線がここで非常にへこんでいますけれども、これが堅堀になるわけです。そして、登り石垣のラインが内膳丸に行きますから、まず海側からの侵入をここで遮断します。それから、堅堀でこっちを遮断する。つまりハの字状に、両手を広げるように、ある場所を守っているわけですね。それがどこかという、真ん中のテニスコートが書いてあるところ、つまり二の丸になります。ここ、山麓に御殿のあったところなんですよ。まさに居館部分を守りたいという意図がこの登り石垣と堅堀で見えてくるということが言えそうですね。

すみません、もう一度、彦根城の絵図をちょっと見せていただきたいのですが、これですね。これちょっと暗くて申し訳ない、彦根城の絵図ですが、登り石垣はここと、それからここに書いてあるんです。実は5本あるんですが、そのうちの2本はこの表御殿と言われる山麓の居館部分、ここを守るために、この本丸から登り石垣が出て、このラインがちょうどこういう具合に来て、ここから上がっていくと鐘の丸に行く登り石垣になります。つまり、両腕で抱えるように館部分を守っているわけです。それはさっき見てもらいました西生浦倭城とかきじやん機張倭城でも一緒ですが、必ず2本つくるわけですね。間を守りたいということです。ここから入らせない、こっち側から入らせないということですね。それと同じことが、どうもこの米子城でも言えそうなんだというのが今回の登り石垣の発掘調査や、あるいは絵図、堅堀からわかってきたのではないかというふうに思っています。

さらにこうした状況から、もう少しマクロな視野で海の城というものをちょっと見ていきたいわけですね。レジュメの8ページをご覧ください。これは広島城の絵図であります。ご存知のように、もう平城です。図5を見ていただきますと、ちょうど絵図のいちばん右下の方に少し黒くなったところ、海が見えます。これ太田川の一番河口ですね。もう海に面したお城だということがわかります。じゃあ、これいつつくられたかといいますと、天正17年(1589)、毛利輝元は広島築城を開始して、ここに居城を移すわけです。

この前に毛利氏は一体どこにいたのかというと、9ページをごらんください。吉田郡山城、あるいは安芸郡山城よしだこおりやまじょうと言われる山の中ですよ。現在、広島市内から車で1時間ぐらいかか

る山間部の吉田町ですかね。安芸高田市になったのかな。そこに郡山城という城が築かれています。郡山城のちょっと写真を見せていただけますかね。この山の上ですよ。広島城というべたっとした、海に面したところは全く違う。図6が郡山城の縄張りですね。もう完全な戦国時代の山城であります。そして突然、天正17年(1589)に毛利輝元は郡山から広島に城を移します。どうもこれは毛利氏の考えではなさそうですね。これにはおそらく、豊臣秀吉が介在していると考えてよいと思います。秀吉が朝鮮出兵をにらんで毛利水軍を出すために、郡山ではなくて、当時、毛利氏にとっては城を築けるようなところではないデルタの下に広島城を築かせたわけですね。ですから、これは秀吉の考えだったのだらうと思います。

しかし、毛利にとっては元就^{もとなり}以来、父祖伝来の郡山城というのは聖地なわけですよ。そんなこと言われてすぐに居城を移せるわけがないので、今までの考えでは天正17年に広島築城とともにこの郡山城は廃城になったと言われているのですが、文献記録を見ると、郡山は、実はその後も修理をした記録などがありますので、一応秀吉に言われたので広島に本城を移すけれども、毛利氏にとってはやっぱり父祖伝来の聖地である郡山城はそのまま維持管理したいということで、廃城にするのではなく残していたようですね。

今度は毛利の重臣であります吉川と、もう一人、小早川という大名がいます。その小早川の居城を見たいわけですね。小早川氏はもともと古高山、あるいは新高山と言われる高山城というところを居城にしていまして、11ページ、図8をごらんください。図8が現在の三原市ですね、広島の三原市になりますけれども、沼田川の上流、^{にいたかやまじょう}新高山城と高山城というのがありますが、もともとここが小早川氏の本城でありましたけれども、それが海に面した三原城に移ります。ここは実は古くて、永禄10年(1567)に小早川隆景^{たかかげ}がまず三原要害というものを築きます。恐らくこれは、小早川水軍の拠点として海へ進出したということが言えそうですね。この写真は、実は三原城の天守台であります。今、三原の裏山にあります桜山城という城の上から撮っているのです。ちょっと木が繁茂し過ぎて見えにくいですが、これ、今はもう三原の市街になっていますが、もともとここ全部ここまで城やったわけですよ。城に新幹線が通ってしまったっていうね…。

10ページの図7をご覧ください。これが、1640年代に描かれた「正保城絵図」という幕府に提出した三原城の絵図であります。もう本丸、二の丸のすぐ前が瀬戸内海だというのがわかっただけだと思います。ここで大変おもしろいのは、その本丸の後ろとといいますか、図でいいますと上のほうに山がいっぱい描いてあります。その山の中に、「城山ヨリ」という文字があって、「城山ヨリ何丁」というふうに書いてあります。つまり、三原に移るけれども、小早川氏は三原城という海城だけではなくて、もし戦争のときはその後ろの山、この桜山というところに城を築いておいて、ここでも戦えるようにしていた。一つは、海への進出で海城をつくるけれども、後ろに山があるのでそこも城にしようという意識を、どうも小早川氏は持っていたわけでありませぬ。

もう少し三原城の写真。これがちょうど桜山城であります。今、ここから撮ったわけす

が、これが三原城の石垣ですね。もう1枚ありましたかね。これ天守台ですね。非常に美しい、扇の勾配状の石垣を持っている天守台であります。新幹線が通ってるとこなんです。こういう海への進出というのが小早川氏にも認められるわけであり。天正8年(1580)から10年(1582)に隆景は新高山からこの三原に城を移します。天正15年(1587)に隆景は一旦福岡、筑前のほうに国替えになります。しかし、文禄4年(1595)、筑前を養子、小早川秀秋に譲って、みずからは三原に戻ってまいります。そして、三原を隠居所として修築するというふうに言われているわけですね。つまり、海につくった三原城というのを隆景はもう最後まで意識しているわけであり。

じゃあ、新高山どうなったかっていうことですが、11ページの図9を見ていただきますと新高山城の略測図があるんですけども、ここの右側の1番と書いてある郭のところの、図面でいうと上の方ですね、二股に分かれているところに郭が点々と築かれています。実はこれ石垣で築いているんですね。矢穴が残されています。先ほどの天正8年から10年に移したのではなくて、その後もどうもここは維持管理されている。どうも、少なくとも慶長5年(1600)ぐらいまではここも使われているようなんです。毛利の本城郡山から広島へ、吉川氏は富田城から米子へ、そして小早川氏は新高山から三原へというふうには、どうも西国の雄であります。毛利氏は山から海へという行動がこの3つの城から見えてくるわけですね。これは、大変注目してよいだろうと思っています。しかも、それぞれ海の城に移った後、従来の説では山の方の城は廃城になったと言われているのですが、実際に現地で確認をしてみますと、それ以後も使われている石垣が残されていたり、あるいはそれ以後も修理をした文書の記録が残っているという点が注目されるわけですね。毛利、吉川、小早川の、私はこれを2城体制というふうに考えています。

米子城が海の城、月山富田城が山の城というこの吉川広家の領国での2城体制。それから、広島城が海の城、郡山城が山の城という毛利本家、輝元の2城体制。そして、三原城という海の城と新高山城という山の城、小早川氏の2城体制というのが見えてくるわけですね。つまり、この米子城は決して吉川氏の城としてだけ考えるのではなくて、毛利氏という枠組みの中で考えていく必要もあるのだろう、それはもっと大きな視点で言いますと、秀吉という豊臣政権との関係がやっぱり見えてくるのではないかというふうに思っているわけですね。

ひょっとすると、米子築城というのは秀吉の命令であったのかもしれない。つまり秀吉は、最初に申しあげましたように、天正19年に吉川広家を大名にします。それと同時に広家は米子築城を行うわけですけども、どうもそこに輝元が広島城を築いたのと同じように、広家も大名となったと同時に米子城を築いたというのは、秀吉の命令に近いものがあつたのではないか。新城を築くのに当たって秀吉の意思というものがうかがえるわけですね。それは朝鮮出兵という未曾有の対外戦をなし遂げるための総力戦の一つではなかったかというふうに思っています。

だいたい天正17年ぐらいから文禄、慶長ぐらひにかけての西国の城づくりというのは、こ

の文禄・慶長の役を臨んだ城づくりだったのだろうというふうに想定できるわけですね。その一翼を担ったのがこの米子城ではなかったかというふうに私は考えています。大変大胆な話で申しわけないのですけれども、そういう思いを持っています。さらに、今度は文禄・慶長の役が終わった後、修築をするわけですが、今度はそれは対徳川を意識したものであった。そこで当時最新と言ってもいい登り石垣というのを米子城につくったのではないかというふうに見ています。ですから、米子の登り石垣は明らかに文禄・慶長の役を経た後ですけれども、それは、今度は毛利領を守るための対徳川戦を意識した改修ではなかったかなというふうに思っています。

この登り石垣については、これからまだまだ発掘調査の成果が期待できる場所なんですけれども、ちょうど登り石垣が終わったところと、それから内膳丸との間に門が築かれています。レジュメの6ページの図3に、出丸と書いてあるところの「出」という字のすぐ左上に門が描かれていますね。この門の後が発掘調査の現場で、現在ここを調査されているわけですけれども、今のところ2時期の門の遺構が出てきているということですね。地山を削ってそこに礎石を配置した最初の門と、それを整地して、次の時代の門と2時期あるということなんです。ちょうど今、ここを掘っておられるのです。ここは門のところですよ。礎石が出てきます。これは最初に吉川をつくったときの門が、ある時期老朽化するなりして解体された。新たにそれ以後、中村なのかどうかはちょっとわかりませんが改修されているというものがあるわけですね。ですから、登り石垣はずっとその後も使われるということが、この発掘調査でも明らかになってきております。

最後にもう1枚だけ、内膳丸に向かうラインの写真がありましたかね。ちょうどこれも今、教育委員会の調査で下草を刈ってくださって見えているのですよね。つまり、登り石垣が遠見櫓からこう来て、ここに門があって、さらに内膳丸に通ずる尾根のところも石垣でこちらには内膳丸があるという、これが築城当初は、海から臨めたわけですよ。

まさに今日、私の話は「海を臨む」ということなんですけれども、海を大手と見たときに、天守から湊山に登り石垣がずっと下ってきて、そのラインはそのまま内膳丸まで行っていた。さらにそれは絵図を見る限り、石垣の上に塀が乗っていたり、あるいは門があったり、櫓があったりするという姿を皆さんに想像していただきたいわけですよ。今の陸側から見る米子城とは全く違った景観。ある意味、2つの顔を持つ城なのかもしれない。海から見た登り石垣を持つ山城と、それから城下町から見越した三の丸、二の丸、本丸という居館部分を正面に据えた枡形の部分の大手を持つ正面の顔と2面性を持っているということです。

現在、両面とも木が繁茂したりしてなかなかいい姿で見ることができないんですけれども、海から石垣が見えたらどんなに圧巻だろうか。さっき言いましたように天空の城竹田城は、海がないわけですよ。米子は海があって、さらにあの石垣が見えれば、これはすばらしい景観になるのではないかというふうに思っているわけですね。現在、調査もされていることですし、現地説明会もあると思いますが、ぜひ一度、海から上っていただいて、あの登り石垣と内膳丸

に至る石塁、石垣を見ていただきたいというふうに思っています。

残り少なくなりましたが、終わりにというところで、やはり何度も申し上げますが、山城から海城への進出。これを抜きに米子城というのは語れないだろうということです。それは、もっとも日本史の中で見れば、単なる山陰の歴史の一コマではなくて、朝鮮出兵というものまで含めた日本の歴史の中で、米子城の新たな位置付けができるのではないかとこのように思っています。

先ほども市長さんのお話にもありましたが、ようやく、米子城の史跡としての整備保存活用計画というのがこれから進められていきます。その中で私が大いに期待したいのは、樹木の剪定といいますかね、残す木は残して、それから繁茂している木はきれいに散髪をしてあげて、石垣と一体化したこの湊山が見えることを望んでいますし、そうになると、より市民に愛される城跡になるのではないかとこのように思っています。あるいは、私は、城跡は町の誇りになるというふうにも思っています。米子の誇り米子城跡として、今回発見された登り石垣や、今日私はあくまでも自分の仮説を述べただけでありますけれども、そういった歴史が新たに掘り起こされることによって、さらに米子城の価値というのは高まっていくのではないだろうかとこのように思っています。

これは最初の基調報告みたいなものになります。第1部としては一応真面目なお話をさせていただいて、今日は第2部というのがありますので、第2部では、お城博士というよりは、城マニアとしてのお城のおもしろさをまた改めて語らせていただきたいというふうに思います。大変雑駁な話で申しわけなかったのですが、一応時間が参りましたので、私の話はひとまずこれで終わらせていただきたいとこのように思います。ご清聴、どうもありがとうございました。(拍手)